
迷子は月の下

藍沢 砂糖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷子は月の下

【Nコード】

N9062L

【作者名】

藍沢 砂糖

【あらすじ】

死んだ者が帰って来ると言われているお盆。祖霊は迎え火に誘われ現世に舞い戻り、送り火に導かれあの世に戻って往く。死者はあの世に帰るとき、寂しくないのだろうか。大学の同窓会が終わり、ぼんやりとしていた竹村裕貴はそこで望月蛭瑠と再会する。足に怪我をしている彼女を自転車の荷台に乗せて家まで送ることにした。

「さて、僕はそろそろ帰ろうかな」

大学の同窓会の一次会が終わり、居酒屋を出たところで竹村裕貴は周りにいる誰に云うでもなく独り言のようにそう呟いた。しかし、その声は真夏の夜のざわめきの所為で誰の耳に運ばれる事もなく、本当に徒^{ただ}の独り言になっていた。

大学を卒業して一年と半分が経ち、同じゼミだった者同士で久しぶりの再会と云い表すには少し早い同窓会を行い、裕貴もそれに参加していた。同窓会と銘打たれているものの裕貴にとってはそれほど懐かしむような機会ではなかった。

別に彼らのことを嫌っている訳ではないのだが、人見知りをしがちな性格の裕貴は週にたった一度だけの授業では彼らと馴染みきる事が出来ず、結局そのまま卒業を迎えたのだった。

裕貴は友人達から少し離れた場所の道路の縁石に腰掛け、夜風にあたっていた。

皆、社会人になり学生の頃のように好き勝手に休みを取ることも出来なくなっただけでこうして盆休みを利用して集まる事になった。

それにしても社会人二年目ともなると皆顔つきが大人びたとまるで傍観者のように感じしていた。

僅^{わず}か一年と少し前までは髪を明るく染めていたり、派手な化粧をしていたりした筈なのに、今ではすっかり社会人の顔になっている。裕貴も周りがしているからと、なんとなく就職活動をし、なんとなく就職し、今ではなんとなく仕事もこなしている。変わってゆく

友人達と何も変わっていないように思える自分を照らし合わせて仄かな劣等感を覚えていた。

折角の同窓会だというのに結局誰と思い出に浸るともなく終わりの時間が来てしまった。そうは云っても裕貴には思い出に浸るほどの仲の者はいない。

楽しそうに、懐かしそうに語らう同窓生達をぼんやりと眺めていた。唯それだけの数時間だったような気がした。

生温い風が吹き抜けて裕貴の頬をするりと撫でてゆく。真夏と雖も夜の風は心地良く感じられる。

一次会が終わっても店の前で団子結びのようになって屯する友人達を尻目に、ふと所在無げに夜空を眺める。

白銀の満月が虚空を飾っていた。

：八月十六日。

九月のそれ程ではないにしろ矢張り満月には心を惹かれる。

毎年お盆が来ると裕貴が未だ小学生だった頃に亡くなった祖母が庭の縁側で話してくれた事を思い出す。

お盆には死んだ人が帰って来る。

祖母の話ではお盆は亡き父母、祖霊を供養するための行事であるそうだ。地獄の釜の蓋が開くお盆には迎え火を焚き死者の魂を迎え、そしてお盆の終わりには死者が迷わぬよう送り火を焚き黄泉へ送り帰すというものだった。

その話をする時、縁側に腰かけた祖母は遠くを見つめているようでどこか寂しげだった。

祖母は昔を懐かしんでいるような優しい瞳をしていたのだが、幼かった裕貴にとってそれは怪談じみたものにしか思えなかった。帰ってくるのが幾ら先祖と雖も死者となれば流石に鬼魅が悪い。

今はお盆も終わりにかけているのもう送り火の時期だ。そんな不気味な存在である死者もあの世へ帰って行く。

裕貴の住んでいる町では灯籠流しで死者を送る。

死者の魂を弔い供え物や灯籠を川に流し、その明りがあの世への道標となる。祖母はそう云っていた。

勿論、裕貴も灯籠流しを見たことがあるが子供のころに見たそれは灯籠の朧げな灯りが本当に人魂のように見えて幻想的ではあるが矢張り鬼魅が悪かった。

その後、祖母が付け足した話が更に怖かった。

死者に魅入られてしまうとあの世に連れて帰られる。

祖母は帰って来た死者に魅入られないようにしなさいと云っていた。

この世が名残惜しく、あの世に帰る際に生きている者を連れて行ってしまう事もあるそうだと。

…もし帰って来た死者に出会ってしまったらどうしよう。

…魅入られてしまったらどうしよう。

そんな事が脳裡^{のうり}を過り、裕貴が泣き出しそうになっていると祖母は皺くちやの手を裕貴の頭にぽんと置いて頭を優しく撫でながら、「送り火を見せてあげるんだよ。ちゃんと帰り道を教えて独りで帰って貰うんだよ」

そう教えてくれた。

不安の消えきらない裕貴には不意に一つの疑問が浮かんできた。

「死んだ人は自分が死んでるってわかるの？」

祖母は深く皺の刻まれた顔でにこりと笑った。

「実は解っていない人も多いんだよ。でもそんな迷子さんには送り火を見せてあげてちゃんと死んだ事を教えてあげようね。そうすればあの世に帰ってくれるから」

「送り火を見せて教えてあげたら大丈夫なの？」

「うん、大丈夫だよ」

「でも自分が死んじゃってるってわかったら、やっぱりすごく悲しいのかな」

裕貴は難しそうな顔をして頭をぼりぼりと掻いた。祖母はそうだねえと相槌を打ち、庭をぼんやりと眺めた。

「ぼく迷子さんに会ったら優しく教えてあげるよ。それで一緒に送り火を見てバイバイって云ってあげるんだ。」

思い付いたように裕貴がそう云うと祖母は裕貴の顔を覗き込み再びにこりと笑った。

「裕貴は優しい子だねえ。」

そう云って祖母は立ち上がり夕飯の準備をするために台所の方へ歩いて行った。

大好きな祖母に褒められて嬉しくなった裕貴は立ち去ろうとする祖母にもう一つ質問を投げかけた。

「じゃあ、自分が死んでるって解ってる人にも送り火を見せてあげれば良いんだね？」

迷いのない肯定が返って来る事を期待し自信満々で質問した。

すると、仄暗い夕方の台所の暗闇に溶け込もうとしていた祖母の足がぴたりと止まった。

軒に吊るした風鈴がりんと甲高い音を鳴らせた。

「駄目……」

祖母は振り返らずにぼつりと答えた。それは低く重々しい声、まるで台所の奥の闇が唸ったようだ。いつもの祖母の声とは違った。

「え。なんで……」

裕貴は慌てて振り向き祖母の背中を不安げに見詰めた。突然辺りの空気が張り詰めた事は子供の裕貴にもはっきり判った。

「解っている人と送り火を見ては絶対に駄目」

祖母の声が今までと違う。穏やかではあるが強く諭すような口調。祖母は重々しい声で続ける。

「本当に……連れて行かれてしまうよ」

その言葉に裕貴は水を浴びせられたように寒気がした。

祖母は続ける。

「自分が死んだ事を知っていて生きている人に近付いて来るのは最初から連れて帰るつもりなんだよ」

だから：口を利いても目を合わせても駄目、祖母はそう結んで口を噤んだ。

夕日で赤く染まった庭を背にして更に訊いた。

「じゃあ、会っちゃったらどうすればいいの：？」

なかなか返事は返って来なかった。

実際には五秒も無い沈黙の時間だったのだろうが裕貴にはそれよりもはるかに長く感じられた。

やがて祖母はゆっくりと顔を半分振り返らせ、怯える裕貴の目を見据えて静かに云い放った。

逃げなさい…。

それだけを云い残すとゆっくりと前を向き直し、暗い台所の闇に溶け込んでいった。

独り縁側に取り残された裕貴の頭上で再び風鈴の音色が響く。暫く茫然としていた裕貴はその甲高い音にはっとして目を醒ました。

…逃げると云われてもどうやって…。

その事を考えると子供の頃の裕貴は夜も眠れなくなる程怖かった。

子供の頃を顧みてぼんやりとしている裕貴の事などまるで見えていないかのように皆は二次会に向かおうとしている。

元々集合時刻が遅かった所為もあり一次会が終わった時には既に日付が変わりそうになってしまっていた。終電を逃してしまった友人達はそのまま朝まで思い出に浸ろうというのだろう。

自分には声の掛かる気配すらない。

それでも寂しくなかなかないと誰にも聞こえない強がりを胸の中で

呟いた裕貴は帰路に着く為、電柱の傍に停めておいた自転車に跨またがった。

裕貴は酒を飲まないのも本当はバイクで来るつもりだった。しかし生憎先日事故を起こして廃車にしてしまったので少し遠いが自転車であつて来た。

ふと辺りを見回す。

裕貴と同じように皆から少し離れたガードレールにちょこんと腰掛けていた女の子がいた。見覚えのある懐かしい顔だ。

夜風に黒髪を靡なびかせて、ぼんやりと白銀の満月を眺める望月蛭瑠もちづきはるの姿を見たのはその時だった。

夜の闇に混じることなく、彼女だけが白くぼくと光っているような不思議な雰囲気に一瞬見惚れていた裕貴だが彼女に声を掛ける事にした。

「蛭瑠は二次会には行かないのか？」

裕貴にとって蛭瑠はゼミの中で唯一まともに会話の出来る仲間だった。そして、淡い恋心を抱いていた相手でもあった。

う、うん。と、少し戸惑った返答を貰った。

ぼんやりとしていたところに急に声を掛けられた所為もあるだろうが、同窓会の間ずっと石像のように黙りこくっていた男が突然口を開いてきたのだ。少しぐらい狼狽うろたえしても無理はないだろう。

艶やかな漆黒の長い髪に透き通るような白い肌、細身の躰からだに纏うブラウスの白色が更に清楚さを印象付ける。何より裕貴を惹きつけるのは異邦人のような神秘的でどこか妖しげな鳶色の瞳だ。そのビーム玉のように円らで大きく、それでいて虚ろな瞳に見つめられると胸の中が掻き回されたようにそわそわしてしまう。

細身の黒い七分丈のパンツから覗く更に細い左足首には痛々しく白い包帯が巻かれている。

…捻挫でもしているのだろうか。

裕貴と同じく蛍瑠も大学では誰かと話したりしている事はあまりなかった。しかし引っ込み思案な裕貴のそれとは少しばかり理由が違う。

蛍瑠は他の人間とは違う。

成績優秀で容姿端麗、それに上品な物腰。極端な話、蛍瑠が机に向かいノートに字を書いているだけでも画になっていた。そう云った意味で蛍瑠には近寄り難い雰囲気があったのだ。

一方、裕貴は至って普通。

美男というには程遠く、背も低くも高くもなく、成績も良くも悪くもなく彼ほど普通という言葉が似合う人間はいないという程よくいる青年だ。

初めて声を掛けたのは意外にも蛍瑠からだった。

大学四回生の秋、大学の図書館で卒業論文の資料を探していた時だった。論文作成に行き詰まった裕貴が本棚の森を彷徨い歩いていると不意に後ろから「竹村君も調べもの？」と澄んだ声を投げかけられた。

声のした方に目を向けると品のある微笑みを浮かべた蛍瑠がいた。

裕貴は息を飲んだ。

所謂高嶺の花である彼女から何処にでも生えている雑草の自分に声を掛けられた事に戸惑い、う、うん。と間の抜けた返事しかできなかった。何よりその雑草の名前を覚えていてくれた事に感激を通り越して驚いた。

端正な顔立ちをした彼女はその華奢な身に似つかわしくない分厚い民俗学や宗教学、世界各国の歴史などの本を何冊も抱えていた。確か蛍瑠の研究課題は――宗教に於ける死後の世界観――というものだった。

どうやら彼女はインターネットを使つての調べ事があまり好きではないらしく今では珍しい図書館での資料収集を行っているそうだった。裕貴も極端な機械音痴だったため同じく資料収集は図書館を

利用していた。

午後の授業が終わり、裕貴が図書館に行くと必ずと云って良いほど彼女はそこに居た。それも夕陽の差し込む西側の窓辺のいつも同じ席で難しそうな本を積み上げていた。

あまりにもよく会うので二人は少しずつ言葉を交わすようになっていた。内気な裕貴も徐々に話す事への緊張が解けてきて自分の事も話すようになっていた。

卒業論文の事、授業の事、友人の事、嬉しかった事、落ち込んだ事、楽しかった事、悩んでいる事。何でも蛍瑠に話した。

蛍瑠はいつも懸命に喋る子供の話を聞く母親のような柔らかい笑顔でうんうんと頷いていた。

：蛍瑠に話を聞いて貰うだけで心が落ち着く。

：蛍瑠が相槌を打ってくれるだけで嬉しい。

西日が差しこむ図書館の窓際の席。

いつからかそこが二人の場所となっていた。

いつも裕貴が懺悔を聞いて貰うかのように自分の事ばかり話すので蛍瑠自らが話題を提示した事は殆どなかった。あっても外国の聞いた事もない管弦音楽や難しそうな本の話だったので裕貴にはへえと解ったような解っていないような頼りない返事をする事が精一杯だった。実のところ全くと云って良い程理解出来ていなかったがそれでも裕貴はその時間が好きだった。

彼も何となく理解できた唯一の話と謂えば「人は死んだ後、どうなるのか」という事。これは蛍瑠の研究課題の分野内でもある。

人は死ねば天国だとか地獄に行くと云われているがそれを知っている者はこの世にはいない。本当はどうなるのだろうか。

その話をしながら、蛍瑠は窓に映る樟くすのきがはらりと葉を散らす姿をぼんやりと眺めていた。その虚ろな瞳には死に対する憂いと、その先の新たな世界への期待のようなものが覗いていた。

その頃、季節はもう冬に近付きつつあった。

旧友たちは裕貴と蛍瑠を残して散り散りにどこかへ行こうと動き始め、徐々に辺りは静かになりつつある。

月が仄かに二人を照らす。

「もう終電もないし自転車で送ろうか？」

勿論彼女の自宅にまでは行った事がないのだが蛍瑠の家は裕貴の帰路の途中にあると聞いていたので自分が帰るついでという口実で彼女にそう勧めた。

裕貴には下心とまで卑しい感情はなかったが学生時代の恋心にあわよくば少し浸りたいという想いはあった。それに怪我を負っている女の子を一人で歩いて帰らせるという薄情者でもなかった。

蛍瑠はもじもじと遠慮しながらも裕貴の言葉に頷いた。

—ありがとう。

小さくそう呟き蛍瑠はにこりと笑った。

笑うと少女のような幼い顔になる。

脚の怪我を庇うようにゆっくりと歩み寄り裕貴の自転車の荷台に腰掛ける。

ふわりと甘い香りがした。

今になって初めて裕貴は同窓会に来て良かったと感じた。運が良ければもしかすると学生時代の淡い恋の夢の続きが見られるかもしれない。月夜に懇意の女の子と自転車を二人乗りなどまるでドラマのような展開ではないか。

裕貴にとってこれは好機であった。

「さ、さあ。しっかり掴まってよ」

うん、と返事をして蛍瑠は自転車の荷台を握り締める。

華奢な蛍瑠を乗せた自転車の荷台はまるで誰も居ないかのように軽かった。

後ろの荷台に蛍瑠を乗せた自転車はゆっくりと進み出す。

蛍瑠の家までは自転車なら凡そ二十分程で着いてしまう。至福の時間はたったそれだけで終わってしまうのだ。

裕貴はここぞとばかりに気の利いた話題を頭の中の抽斗ひきだしから引っぱり出そうと試みたが残念ながら普段から整理が行き届いていない所為で戴たいした話題が咄嗟たいさには出てこなかった。

「足、大丈夫？」

案の定、気の利いたものではなかった。

それどころか久し振りに話す所為もあって少し気負ってしまい単語のみの片言のような問いかけになってしまっている。もしかすると無愛想な印象を与えたのではないかと肝を冷やした。

—うん、だけど未だ少し痛むの。竹村君が送ってくれて助かるよ。返事が返ってきたので裕貴は胸を撫で下ろした。心の中でほっと一息つくとしわりと安堵感が沁み広がる。

「どうしたんだよ？ 事故？」

—去年の冬は珍しく雪が積もったでしょ？ マンションの階段で足を滑らせちゃったの。それからはよく覚えていないわ。頭も打っていたみたいなんだけど…。

「もう半年以上経つのに未だ痛むんだ。」

—ちよつとね。

優しい笛の音のような声が裕貴の耳朵じだをなぞる。

蛍瑠の声は不思議だった。

背中越しに居るはずなのにもっと遠くから聞こえてくるような、寧ろ耳元で囁かれていたような、そんな印象だった。

裕貴は彼女の声も好きだった。

儂いほどに弱々しいが上品で淡く甘い声。

例えばどれ程気持ちが高まっている時でもその声で優しく諫めいさられる

と夜の湖の水面のような静寂に心が包まれる。

少し顔を後ろに向けるだけで彼女の姿を見る事も出来る。しかしそうはしなかった。現実と幻想の間を揺蕩たゆとうようなその儚げな声を聞いていると、その姿を見てしまえばまるで夢から覚めてしまうかのように彼女が居なくなってしまうのではないかとすら思えたからだ。

背中越しの会話。

久しぶりに会ったので顔を見るのも何となく照れ臭いという事もあり、これが一番良いと裕貴は思っていた。

「学生時代の友達とは今でも会ったりする？」

会話が途切れることに不安を覚える裕貴は前の話題が終わるとすかさず次の話題を持ち出す。

―卒業してからは時間が合わなくなったからあんまり会わなくなつたね。亜希子や加奈たちは今どうしてるんだろう。

蛍瑠はふと学生時代の友人の名前を口にした。

「ああ、あのよく喋るのと無口なのか。」

同じゼミではなかったがその二人とは親交があつたようだ。話した事はないにしろ裕貴も顔ぐらいいは覚えている。

―竹村君も知ってるんだ。あの二人全然違う性格なのにもいつも一緒だったよね。

くすくすと微笑混じりに蛍瑠が答える。

自分の直ぐ後ろから蛍瑠の声が聞こえる。

微笑んでいるであろう彼女の姿は見えないものの、蛍瑠がすぐ傍に居る事を改めて実感して裕貴はまた嬉しくなった。

もつと思ひ出話に花を咲かせていたい所だったが愈々この話題も尽きようとしていた。次は何の話にしようかと裕貴が思索に耽いよこっていると、とうとう二人の周りを沈黙が支配しようとし始めた。

…拙まずい。

何か面白い話を、と考えれば考えるほど逆に面白い話というもの

は浮かび上がって来てくれない。

蛍瑠に乗せた自転車は賑やかな繁華街を抜け静かな住宅街へと差し掛かる。やがて気^き不味^{まず}い沈黙が二人を包んでいった。聞こえるのは叢^{くさむら}で鈴虫の鳴く声と自転車の錆びたチェーンが寂しそうにからからと鳴く声だけ。

その厭^{いや}な静寂を破ったのは蛍瑠の声だった。

―お盆には死んだ人が帰って来るんだよ。

ひゅう、と音を立てて風が鳴く。

真夏には似つかわしくない冷たい風が二人を包んだ。

三

なぜ蛍瑠は急にそんな話を切り出したのだろう。

裕貴は不意にそんな疑問を感じたが、きっと沈黙に耐えきれなくなっってそんな事を云ったのだろうと一人で納得した。そして退屈を呼んだ自分自身を不甲斐なく思い、齒痒かった。

―竹村君も勿論知ってるよね。

「そりゃね。僕も子供の頃はお盆になると墓参りに行ったりしていたからね。そんな事、日本人なら誰でも知ってるんじゃないかな」

―そう、じゃあ話が早いわね…。

「え、どういう意味？」

背中越しの蛍瑠の言葉に訝しげな表情を浮かべながら裕貴は言葉を返す。

…話とは何の話なのか。

裕貴の質問の答えの代わりには次の質問が返ってきた。

―竹村君は生きているってどういう事か…解る？

裕貴は暫し逡巡^{しゅんじゆん}する…。

「そうだな：話したり動いたり出来るって事かな」

—うん、それに生きているときは身体の成長と保持が出来ているの。死んでしまうと成長が止まり保持も出来なくなる。

「成長と保持：」

蛍瑠の云った言葉を鸚鵡わうむのようにそのまま繰り返した。

その真意が彼には良く理解出来ていない。

—死んだ人の軀は成長しないよね。保持が出来なくなるといのはつまり肉体が腐るとい事。皮膚が土色に変色を始め、眼球が水分を無くし、体は蛆うじに喰われて爛ただれるように失われてゆく。最後に残るのは骨：。

唯ただそれだけなの、と蛍瑠は静かに結んだ。

「うん：」

突然の意外な話題に裕貴は唯々相槌を打つ事しか出来ない。

—そうなってしまえば流石に話したり動いたり出来ないよね。

それなら人が生きていられる条件ってなんだろう。

次々と質問が投げ掛けられる。何だか裕貴は試されているような気分になった。

「じゃあ、心臓が動いているって事かな：。」

—つまり心臓から脳をはじめとする全身へ酸素が送り続けられている事なのよね。それで成長と保持は出来るのよ。でも、それだけで生きているって事になるかな？

蛍瑠が言葉尻を上げて尋ねる。

—何かが足りないよね。

：何かが

：足りない？

：成長と保持が出来ているだけでは何かが違う。

：それだと植物と同じだ。

：足りないとするば

「心か！」

裕貴はここぞとばかりに自信満々で答えた。

―正解よ。

―正常に働いている肉体でも心が在って初めて動かせるの。心はどこに在るのかな？

また新しい問いが投げ掛けられる。

「頭？ いや、胸かな…」

―心は見えないものの…そして形も罔い^な。だからどこに在るのかは解らない。それに対して見えるものは肉体ね。

「ううん、難しくなってきたな」

奇妙な問答が続く。

―心は肉体と違って形が無いから朽ちたりしないよね。肉体が死んでしまつて朽ちた後、心はどうなるんだろう。

「朽ちた肉体には留まる事は出来ないよね…」

裕貴は眉間に皺を集め考える。

…心は

…肉体と一緒に朽ち果てるのだろうか？

…それとも消えはしないのだろうか？

…消えないのならどうなる？

「ああ、解らないよ！」

返答に悩む裕貴を尻目に蛍瑠は更に次の質問を投げかけてきた。

―じゃあ、死ぬとその人の心は何処へ行くのかなあ。

これは学生の頃にも蛍瑠が疑問に思っていたことだ。

ふと図書館の窓の外の風景が蘇った。

「天国とか。じゃないのかな…」

―なるほど…じゃあ後、地獄もだね。

愉快そうに蛍瑠が小さく呟く。

―お盆には地獄の釜の蓋が開くの。それで死者はこの世に帰ってくる事が出来る。でも、やっぱり戻りたくない死者も多いのよ。だって地獄に戻ると再び獄卒達の責め苦が待っているんだから当然かもね。竹村君ならどう思う？

突然話を振られて裕貴は躊躇した。

：戻ると辛い事が待ってるんだろ
：それなら決まってるよ。

「僕なら、きっと戻りたくないと思うよ」

―そうよね、私もそう思う。折角この世に戻って来られたんだもん。絶対に帰りたくないよね。絶対に…。

蛍瑠の言葉の最後は少し曇っていた。

―それに帰る時は独りぼっちなんだよ。私、独りが怖いんだ。小学生の頃もね、独りで家に帰るのが怖くていつも誰かを待って一緒に帰っていたの。死んじゃったら独りなんて、厭だなあ…。

蛍瑠の声が沈んでいる。

大学で蛍瑠はその高貴な雰囲気^{ハル}の所為か独りでいる事が多かったような気がする。毅然としていたが矢張り本当は寂しかったのだろうか。

自転車は住宅街の信号もない小さな交差点に差しかった。

―あ、そこ右に曲がってね。

裕貴は云われたとおりの道を進む。

二人を乗せた自転車は住宅街を抜けると河川敷に出て大きく視界が開けた。右手に二つの町を隔てるようにして流れる大きな川に臨んで進む二人に湿気を孕^{はら}んだ生温かい風が吹いた。

―本当に嬉しかったんだよ。

「え？」

蛍瑠の唐突な言葉に裕貴は素っ頓狂な返事をした。

―竹村君が送ってくれて。

「あ、ああ」

―怪我した足で歩いて帰ることよりも独りで帰る事の方がよっぽど辛いんだ。もし独りで帰ることになってたら。私、泣いちゃったかも…。

また蛍瑠の声は弱々しくなる。

「泣くのかい、蛍瑠もまだまだ子供なんだなあ」

蛍瑠が弱みを見せるなど今まで一度もなかったので裕貴は少し面白がって擲^{からか}ってみた。

―本当だよ！

―本当に……。怖いのだ。

蛍瑠が感情的になる事は滅多にない。

予想以上の反応に裕貴はたじろいだ。

―一人でいるとね：気が付いたらそのまま何処か知らない世界に迷い込んでしまうような気がするのだ。

―だから、すごく、怖い……。

蛍瑠の声は今にも本当に泣き出してしまいそうな程弱々しく震えている。どうやら相当独りでいる事に不安を感じているらしい。

「……擲^{からか}ってごめん」

裕貴の謝罪の言葉に対して背中越しの蛍瑠からの返事はすぐには返って来なかった。気不味い沈黙がじわじわと裕貴に襲いかかる。

蛍瑠は独りになるのが怖い、しかし裕貴にとっては蛍瑠に嫌われる事がそれと同じぐらい怖い。

静けさの中に再び自転車のチェーンだけがからからと鳴いている。長く重い沈黙を破ったのは蛍瑠の方だった。

―竹村君。

不意に名前を呼ばれた裕貴は口から心臓が飛び出そうになった。次に背中越しの蛍瑠から投げかけられる言葉を想像し怯えていた。

もしかしたら「嫌い」とはつきり云われるのではないか。裕貴は狼狽している。まるで処刑台に立たされているようだ。

―うふふ。

意外にも背中越しに悪戯好きな少女のような笑い声が聞こえた。

―ありがとうね。

「へっ？」

全く予期していなかった言葉に先程にも増して素っ頓狂な返事を

してしまった。

―竹村君のお陰で寂しくないもん。

蛍瑠の声はいつも通りの穏やかな声に戻っていた。裕貴は恐る恐る訊いてみた。

「怒って…ないの？」

―全然怒ってないよ。それどころか感謝しているぐらい。もし竹村君が声を掛けてくれなかったら私、本当に独りで泣いていたよ。

どうやら裕貴の不安は杞憂に過ぎなかったらしい。

―本当に竹村君は私にとって白馬の王子様みたいだよ。

流石にそれは善く云い過ぎだろう。今、跨っているものも白馬と喻えるにはどうも頼りなく安っぽい自転車だ。裕貴は少し困った顔になった。

「いや、あの、そんな戴したもんじゃないよ。ただ蛍瑠が足に怪我をしていたから、あの、その…」

辿々しい裕貴の言葉を蛍瑠は遮る。

―竹村君のそういうところが好きだな。最後までお願いね。王子様。

裕貴は照れ臭そうに髪をかき上げた。

今、決して後ろを振る返る事は出来ない。余りの照れ臭さに裕貴の顔は真っ赤に染まりとても蛍瑠に見せられた物ではない。

裕貴は蛍瑠とこうしていられるだけで幸せだった。

幸福の火照りを冷ますように生温い夜風に身を当て、ふうと深く息を吐いた。天を仰ぐと月がよく見える。そして時間が止まったように辺りは静まりかえっている。

「やっぱり死ぬのって苦しいのかな」

―どうして？

先程の様な死の話になるとどうしてもバイクを廃車にしてしまった先日の事故を思い出してしまう。裕貴の中で最も死を身近に感じた体験だ。

「この前、僕も雨の日にバイクで転んだ事があってすごく恐い目に遭ったんだ。運よく僕は何ともなかったんだけど、もし頭なんか打ったりしていたらと思うと…」

…死んでいたのかも。

不吉な言葉が脳裡を過り、語尾が途切れてしまった。

その時は間一髪助かった裕貴だがスリップして命令を聞かないハンドル、スローモーションのようにガードレールが眼前に迫る映像を思い出し声が震えていた。

「僕は…。やっぱり僕は死ぬのが怖い」

ふわりと蛍瑠の吐息が耳にかかる。

—大丈夫よ。

—もう怖くないから。

そう云うと蛍瑠は裕貴の背中にぴたりと頬と^{からだ}軀を当て腰に白く細い腕を回した。

「蛍瑠…」

裕貴は驚愕した。

…冷たい。

蛍瑠の頬も腕も氷のように冷たい。

裕貴は蛍瑠の言葉を反芻した。

—マンションの階段で足を滑らせちゃったの—

—頭も打っていたみたいなんだけど—

まさか、蛍瑠はその時に…。

…蛍は

…死者なのか？

そしてもしかすると蛍瑠は気付いていないのか、自分がこの世の者ではなくなっている事に。

もし今、彼女に魅入られてしまったら本来彼女が居るべき世界にそのまま連れて行かれるかもしれない。もしそうだとしたら帰って

貰わなければいけない。

…八月十六日。

今日でお盆は終わりだ。

冷たい汗が一筋、裕貴のこめかみから頬、顎先へと滴る。真夏だというのに寒気が襲い掛かり裕貴の全身に鳥肌が立った。

—もう大丈夫だから…ね。

怖くない、怖くない…。蛍瑠は背中に冷たい頬を押し当てたまま子供をあやすように優しく裕貴を諭している。

「蛍瑠：君は…」

裕貴の声は言葉にはならなかった。

辺りに人の生活の灯りはなく仄明るい満月だけが彼らを照らし出している。耳を澄ませばさらさらと川の流れる音が聞こえて来そうな程静かな夜。再び生暖かい風が頬を撫でていった。

—家に帰るまでは一緒にいてね。寂しいから…。

背中から蛍瑠のしっとりと濡れた声がする。

—私の

—王子様…。

今にも消え入りそうな程儚げな声で蛍瑠はそう呟いた。

四

背中越しの蛍瑠は眠ってしまったのか、それともその存在が消えてしまったのかのように黙り込んでしまっている。

ただ裕貴の腰に回された冷たく白い腕だけがその存在を証明している。

裕貴は冷静になろうとした。

…馬鹿馬鹿しい。

…死者がこの世に舞い戻って来るなど有り得ない。

…そんなもの迷信に過ぎない。

…祖母の云っていた事も子供の頃は怖かった

…それでも今となってはただのよくある怪談話の一つに過ぎない。

…断じて蛍瑠は死者などではない。

…現に背中越しに確^{しっか}りと存在しているではないか。

…だから。

…蛍瑠は死者などではない。

裕貴はそう自分自身に云い聞かせた。

しかし一度生まれた疑問は疑惑に変わり白紙に零^{こぼ}れた一滴の墨汁のように目立ち、なかなか頭から拭い去る事が出来ずにいた。

裕貴は常識と迷信との間で葛藤している。

やがて川に架かる橋が見えて来た。

―あの橋を渡るの。

久しく蛍瑠が口を開いた。少し向こうに大きな橋が見える。

―この川を渡ればもうすぐよ。もうすぐ。

川を渡る…。

賽の河原から渡し船で三途の川を渡ればそこは黄泉の国。

そんな云い伝えと今の状況を照らし合わせると少し背筋が薄ら寒くなる。この先は彼女の世界なのだろうか。

額に滲む厭な汗を手の甲で拭いながら、頭の中にへばり付いた疑惑を振り払うようにペダルに力を込めた。

やがて、橋の前に辿り着いた。

近くで見ると長さはあるがそれ程大きい橋ではない。車の通れる幅もなくせいぜい三人並んで歩くのがやっとといった狭さだった。

しかもこのご時世に木製だ。薄暗く、灯りといえればつりぼつりと等間隔に柿色の街灯が灯っているだけだった。

闇が大きく口を開けている。本当にあの世への入り口のようなのだ。

―暗いでしょ。怖いのか？

蛍瑠がくすくすと笑う。今度は蛍瑠が裕貴を^{からか}擲った。

「大丈夫さ。ぼ、僕はもう大人だよ」

また言葉が詰まってしまった。

本当は矢張り怖いのだが女の子の前という建て前上、怖いなどと正直に云う事は出来ない。しかし蛍瑠は彼の心の底にある僅かな怯えを察知したのだろうか、裕貴の後ろからくすつと笑う声が聞こえた。

「笑わないでくれよ」

―ご、ごめんごめん。

蛍瑠の声は僅かに震えていた。矢張り笑っていたようだ。

「僕は王子様なんだろう？　ちよつとは頼りにしてくれよ。さあ進むぞ、お姫様」

そう云って自分自身を奮い立たせ、裕貴は暗闇の入り口に向かって自転車をこぎ出す。

…蛍瑠は死んでなんかない。

…生きているんだ。

頭の中で何度もそう自分に云い聞かせた。

橋は木造の為か自転車が進む度に橋板がかたかたと鳴る。

橋の上まで来るとさらさらと川の流れる音も耳を澄ませば^{かす}幽かに聞こえて来る。その川のせせらぎに混じって蛍瑠の澄んだ声が背後から聞こえる。

―孟蘭盆。^{うらぼん}

「え？」

―お盆って本来は孟蘭盆って云うの。

「うらぼん…？」

また聞き覚えのない言葉が蛍瑠の口から零れる。

―竹村君は仏教の事は分かる？

「お坊さんがお経を読むんだろ？ ナムアミダブツって」

裕貴にはそれぐらいしか分からなかった。しかし蛍瑠は構わず話を続ける。

―六道りくどうって聞いたことある？

「りくどう…いや。知らないなあ」

―天界道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道の六つが六道。そのどこかに人は輪廻する、つまり生まれ変わるの。

死後の世界に関して流石に蛍瑠は詳しい。

―お盆はね。お釈迦様の弟子の目連尊者もくれんが餓鬼道に堕ちた亡き母を供養した事から始まったの。

「餓鬼道っていうのはその名の通り食べる物がいないのかな？」

―いいえ。食べる物はあるの。

「じゃあ何で餓鬼なんて云うんだい」

―食べ物を食べられないからよ。

「え、でも食べ物はあるんじゃないのか？」

眉間に皺を寄せ裕貴は怪訝な表情を作った。

―食べ物はあるんだけど食べられないの。

「何で？」

―食べ物や飲み物を口まで運ぶとそれが炎になって消えてしまうのよ。

「うわあ、それは地獄だな」

裕貴は眉を顰め、舌を出しながら云った。

―ふふ、地獄はもっと酷い所よ。

―もっと…。

蛍瑠の吐息が裕貴の項うなじを撫でた。その感覚が妙に生々しく感じられて、ぞくりと鳥肌が立った。

―地獄がどんな所か教えて欲しい？

蛍瑠は裕貴の項うなじに人差し指をひたりと置いた。冷たい指の感触に裕貴の汗は冷汗に変わった。

動揺して何も答える事は出来ない。

―ねえ？

冷たい指先はそのまま、つうと背中から腰へとゆっくり下りて行った。裕貴はその指になぞられてぴんと背筋が伸びた。

慌てて話を元に戻そうとした。

「それで：そのモクレンさんはどうしたの？」

蛍瑠は一瞬不敵な笑みを漏らしながらも淡々と答える。

―目連尊者そんなふうになった母を救う為にお釈迦様に相談したのよ。するとお釈迦様は安居あんごの最後の日に総ての比丘びくに食べ物を実施ば母の口にもその施しが入ると云ったの。

「あんどびく？」

先程から知らない言葉が泉のように滾々（こんこん）と溢れ出して来る。

―安居は皆でする修行の事で、比丘って云うのはお坊さんの事よ。目連尊者はお釈迦様が云った通りに総ての比丘に食事を施したの。すると餓鬼道に堕ちた母にもその施しを通じたの。

―それがお盆の由来よ。

そう云って蛍瑠は仏教の小難しい話を結んだ。

「なるほど、それでお盆は死者の供養か」

裕貴は濃紺の虚空を眺めながら頷いた。

―それで死者はこの時期に帰って来るの。ほら、川岸を見て。

裕貴は自転車のハンドルを握りながら不安げに川岸に目を遣る。

「何だよ。幽霊でも居るのかい」

―居るのかもね。

―それより岸辺の草が刈り取られているでしょう。死者は先ず山の麓や川辺に降り立つの。だから死者が家に戻って来易いように草を刈り取るのよ。

「そ、そうなんだ」

ふと川辺に死者が彷徨っているのではないかという事が脳裡を過

っていた裕貴は少しほっとした。その恐れを蛍瑠に悟られまいと必死に取り繕おうとしたがまた言葉が詰まってしまった。

長く話している間に自転車は橋を半分以上渡り切っていた。

—わあ…。

嬉しそうに蛍瑠が裕貴の背中をぽんと叩いた。柔らかい手のひらの感触が裕貴の背中に伝わる。

「何だよ、急に」

—双子の満月。

蛍瑠の言葉に川の方に顔を向ける。

白銀の満月がふわりと闇夜に浮かんでいる。そして視界の外れで蛍瑠の白い人差し指がその月を指している。

「双子？月は一つしかないじゃないか」

—川面を見て。

視線を下ろすと虚空に浮かぶ満月が反射して川面にもう一つの満月が浮かび上がっている。

—月も二つ。私達も二人。一人一つずつね。ふふふ。

蛍瑠が背後で嬉しそうに微笑む。

「何だよそれ」

裕貴もつられて笑い混じりに聞き返す。するとまた蛍瑠の氷のように冷たい頬が背中に押し当てられた。その冷たさに裕貴はぞっとした。

—ふふふ。

蛍瑠が眠たそうな声で力なく笑う。

その朧おぼろな声と肌の冷たさに一時は消えかけていた疑惑が蘇る。

…蛍瑠は矢張り死者なのだろうか。

そんな不安が再び蘇った。

一つは虚空に浮かぶ円い月。もう一つは川面に揺れる爛れた月。

一つずつとは裕貴と蛍瑠、どちらがあの爛れた月なのだろうか。

―竹村君。あれ。

不穏な事を考えていたところに突然声を掛けられたのでびっくりと引き攣ってしまった。

―ほら、川の向こうから。

蛍瑠の声が指す方を見る。川の上流の方が月明かりとは別にぼくと輝いている。

―灯籠流しよ。

川の奥の方から薄ぼんやりとした灯りが川を下って来る。

「送り火：か。あの世への道標」

―死者達が帰って行くのね：。

川の流れに身を任せこちらに向かって漂ってくるそれはまさしく闇夜に漂う靈魂を彷彿させて幻想的だった。

裕貴も川面に漂う灯籠に見惚れてしまっていた。

―きれい：。

ぼそりと蛍瑠が呟いた。

「うん、きれいだね」

：きつと蛍瑠は死者だ。

裕貴は気を引き締めた。もし蛍瑠も死者であるならばこの送り火で送ってあげなければならぬ。もしかするとこのままでは自分も蛍瑠にあの世へ連れて行かれるかも知れない。

―まだ時間ある？

裕貴の肩に顎を乗せ、蛍瑠が乞うように甘く問いかける。

「僕はまだ大丈夫だけど、どうしたの？」

すう、と蛍瑠は静かに息を吸った。

―もっと近くで見たい。川岸まで、行こうよ。

彼女に真実を伝える為にもそうする事が最も良い。

裕貴は胆はたらを括った。

「ああ、そうしよう」

裕貴ははっきりと云った。

長く話している内に橋の終わりが近付いて来ていた。双子の月を横目にしながら今から二人は爛れた月が待つ河岸へと向かおうとしている。

…そこで彼女に伝えなければ。

生温い夜風は川岸に繁る夏草の匂いを運んで来た。

五

二人は久しぶりに地面を踏んだ。

橋詰に自転車を置き、堤防から河岸へ向かう^{コンクリート}混泥土の階段をゆつくりと下っていた。少し先に行く蛍瑠は大きな段差を一段一段、両足を揃えてまるで子供のように腕を振りながらぴょんと跳び下りている。

最後の一段で^{バランス}均衡を崩して少しふらついた。

「おい、大丈夫か！」

咄嗟に蛍瑠を気遣い、彼女に駆け寄って両手を差し伸べる。

—うん、大丈夫。やっぱりまだちょっと足が痛いな。

「怪我してるんだから無茶するなよ」

—心配してくれるんだ。ありがとう。

蛍瑠が裕貴の方に振り向きにこりと笑った。

「蛍瑠…」

妖しげで虚ろな蛍瑠の瞳に裕貴は捕えられてしまった。視線を外す事が出来ない。その妖艶な瞳の色に裕貴の心臓は驚掴みにされた。柔らかな月明かりに照らし出された蛍瑠の姿は本当にこの世の物とは思えない程に美しい。

…魅入ってしまった。

例えば地獄であろうと何処であろうとも蛍瑠になら連れて逝かれて

も構わない。彼女の姿を見ていられるのならば。

ふと、そんな事も考えてしまった。

―何をぼんやりしてるの？

―ほら、川までもう少しだよ。

ああ、と空返事をした裕貴は少し先を歩く蛍瑠を追うように付いて行った。

膝ほどの高さまで生い繁る夏草が行く手を邪魔して歩くだけでも億劫な道なき道を、怪我をしている筈の蛍瑠はすいすいと進んで行く。裕貴は纏わりつく背の高い夏草を払い除け進む事に難儀していた。

足を踏み出す度にじゅうと音を立てて、湿った土の気持ち悪い感触が足に伝わる。

「蛍瑠、待ってくれよ」

駆け足気味になり、やっと蛍瑠に追いつき肩を並べて歩く事が出来るようになった。

辺りに灯りなどはなく罔うつかげの中に蛍瑠の横顔が見え隠れする。

―もし死んでしまっても、自分が死んでいる事に気付かない事ってあると思う？

前を向いたまま蛍瑠が問い掛ける。しかしその表情は夜の闇と漆黒の長い髪に隠れてはつきりと窺う事は出来ない。ただ彼女の口元はほんのりと綻んでいて笑っているように見えた。

「気付かない事もあるみたいだよ。まあ、死んだおばあちゃんが云っていた事なんだけどね」

―じゃあ竹村君は今、生きているの？

唐突な質問に裕貴は戸惑う。

「あ、当たり前だろ。こうして君と話もしているじゃないか。」
少し焦りながらも即答した。

―私の事はどう思う？

影の中から蛍瑠の眼だけがこちらを向いたのが解った。

「君は死者なんかじゃない！ほら、足だって有るだろ！」

胸の中のもやもやした不安の雲を振り払うように声を荒げた。

―足が無い幽霊なんて江戸時代に入ってからデザインの意匠なのよ。結構最近でしょ。人形浄瑠璃の挿絵に足の無い幽霊が描かれてから初めてそんな認識イメージが生まれたんだよ。だから本当は足が在るか無いか、見た目だけで判断なんて出来ないの。

蛍瑠が何を云いたいのか解らない。

―死者はやっぱり寂しいんだよ。だから生前懇意にしていた者を連れて行ってしまう事もあるの。例えば仲の良かった夫婦の奥さんが病氣なんかで亡くなったあと、旦那さんも後を追うように亡くなるって事もあるでしょ。

言葉を返せない裕貴を尻目に蛍瑠は立て板に水の如く言葉を連ねてくる。

―竹村君は私の友達だよ？

「う、うん。友達だよ」

言葉の真意を掴めない裕貴は恐る恐る答えた。

―ありがとう、そうだよね。

―友達だよ。

―じゃあもう一つ訊くね。

―私の事：死者だと思う？

蛍瑠は表情の無い磁器人形ビスクドールのような横顔を裕貴に向けてぽつりと呟く。何故その質問なのだ。

冷たい水を背中に流し込まれたように寒気がした。今度は何も答える事が出来ずに押し黙ってしまった。狼狽している裕貴はやつの事で言葉が出た。

「何でそんな事訊くんだ？」

必死に冷静を取り繕う。

―答えて…。

裕貴の質問は容易く打ち消された。先程から考えの通り矢張り蛍瑠はこの世の者ではないのだろうか。

蛍瑠は死者ではないという希望も徐々に薄くなってきていた。そして、思い切って恐る恐る訊いてみた。

「まさか…。ほ、蛍瑠は死者なのかい…？」

そう問いかけると蛍瑠はぴたりと歩を止め、静かに俯いた。その表情は長い髪に隠されて窺う事が出来ない。

辺りは不気味な沈黙に支配された。

鈴虫がか細い声で鳴いている。闇の奥から川のせせらぎが聞こえてくる。

蛍瑠は俯いたまま、ただ黙している。

金属の箱に閉じ込められてしまったかのように空気が重い。

彼女は魂を持たない人形のように動かない。

「蛍瑠？」

何の反応も無かった。

その時、河原に一陣の風が通り抜け、蛍瑠の黒い髪が風に靡いて彼女の白い顔が見え隠れした。

俯いたまま目を閉じている。その姿は本当に人形のようなだった。

人形は目を瞑^{つむ}ったまま静かに上を向いた。月明かりにその肌が青白く照らし出される。そして薄く目を開き、月を眺めた。

そして、瞳だけをゆっくりと動かせ裕貴の方を見た。

虚ろな瞳をしていた人形はぎんと目を見開く。

裕貴はひいと情けない声を漏らしてたじろいだ。

全身の毛が逆立ち、舌がからからに乾いた。

その瞳は空洞、暗く深い穴、異界への入り口のようなだ。裕貴の知っている神秘的な鳶色の円い瞳とは違う。

人間の目ではない。

「まさか、君は本当に…」

裕貴は震える声を振り絞った。

くす、と品のある笑い声が鼓膜をくすぐ撥る。

―さあ…ね。

曖昧にそう答えると蛍瑠は首を前に向き直し、再び眠たげに眼を細め、無邪気な少女のようにくすくすと小さく笑っている。

疑惑は確信に変わった。

…蛍瑠は死者だ。

そして、彼女は自分が死者である事を解っている。つまり生きている者をあの世に連れて帰るつもりなのだ。彼女はもう人間ではない。

化け物だ…。

先程まで否定していた非現実を目の前にして裕貴の足はがたがたと震え出し、胸の中は恐怖に支配されつつあった。

逃げなさい。

祖母の言葉が脳裡を過る。

…そうだ、逃げなければいけない。

…このままでは彼女に連れて行かれてしまう。

…厭だ。

…あの世へなんて行きたくない。

…逃げろ。

…逃げるんだ。

裕貴は必死に震える足を動かそうとしたが、恐怖に震える足はまるで自分のものではないかのよう云う事を聞かない。

不意に裕貴の手を蛍瑠の冷たい手が握り締めた。裕貴の呼吸が止まった。冷たい汗が首筋を伝う。

確かめるようにゆっくり呼吸を再開させながら慎重に蛍瑠の方に視線を遣った。

見ている。

じっと見ている。

彼女の暗く深い二つの空洞がこちらに向かって口を開いている。

―約束だよね。

蛍瑠が妖しげな声で問いかける。

―一緒に送り火を見るんだよね。

逃がさないと云わんばかりに裕貴の手は強く、確^{しっか}りと握りしめられていた。

裕貴の中に絶望とも諦めともとれる感情がふと浮かんだ。もう駄目だ、あの世に連れて行かれる。

彼女に魅入られてしまった。

―さあ、川はもうすぐそこよ。

―行こう…。

蛍瑠は手を握ったまま灯籠の浮かぶ薄明るい川辺へと歩みを進めていった。抵抗できない。裕貴も冷たい手に誘^{いざな}われるままに進んで行った。

この先には…

…黄泉の国があるのだろうか。

六

水の匂い、とでも云えば良いのだろうか。そんなものを感じる。

どこか懐かしい。昼間の太陽の残光を弱々しく反射させる月の灯りが辺りの叢^{むく}を優しく照らしていた。

ふと蛍瑠の足が止まる。二人は川辺に辿り着いたのだ。

―不思議な光ね。

蛍瑠は手を解き一人頼りない足取りで川に近付いて行った。川面にはぼんやりと光る玉がいくつも浮かんでいる。

送り火。

灯籠が川面を流れている。その光はふわふわと水の流れに身を任せるように漂っている。

まるで鬼火だ。

浮世離れした美しさでありながらも、どこか畏れを感じる神秘的な輝き。

：あれが送り火。

：あの世への道標。

仄かな光を放つ川面。その前に蛍瑠の後姿がある。艶やかな黒髪と白いブラウスが風に揺れていた。その二つの対照は風景に非常に良く馴染んでいた。まるで絵画のように美しい。

—もうお盆も終わりなのね。

背を向けたまま蛍瑠は云った。

—死者は帰らなければならぬのよ。

裕貴はぎくりとなって背筋が伸びた。自分はこのまま蛍瑠に連れて行かれてしまうのだろうか。

相変わらず裕貴の足は命令を無視し続けている。

逃げられない。声を出す事も儘ままならない。

—私の話を聞いて。

蛍瑠がこちらを振り返る。そして薄い唇が幽かに動く。

—死ぬのが怖いのか？

静かに言葉を零す。裕貴は答える事は愚か、指一本動かす事が出来ない。

蛍瑠はじつと目を見ている。

—なぜこんな事を訊くか解る？

蛍瑠はまるで幽霊のように肩を揺らす事無く、すうと近付いて来る。一つ言葉を発する度に一步、また一步とこちらに歩みを進めて来る。

—鈴虫が鳴いているね。

—風が気持ち良いね。

―水の匂いがするね。

―月が綺麗だね。

―でも。

―もう帰らなきゃ。

―灯籠が流れて行くよ。

―ねえ。

―聞いてる？

―もう時間なのよ。

―私を見て。

―うふふ。

―さあ。

―どうしたの？

―死ぬのが怖いのか？

目の前に蛍瑠の顔が現れた。

思わず裕貴は一步後ろにたじろいだ。

蛍瑠の暗い瞳がじいっと覗き込んでいる。まるで獲物を品定めしているようだった。

「怖いよ！」

裕貴は声を振り絞った。

「厭だよ、僕は死にたくなんかないよ。あの世へなんか行きたくないよ！ 確かに僕は生きているのか死んでいるのか分からないようなダラダラした生活をしているよ。何の目的もない人生を送っているかもしれないよ。だけど…」

裕貴は声を震わせながら云った。今にも泣き出しそうだ。

「だけど…。やっぱり死ぬのは厭だ。生きていたいんだ！」

蛍瑠はじっと黙っている。

「だから…。」

—だから？

裕貴は息を大きく吸い、言葉を放った。

「僕は君とあの世へ行くのは厭だ！」

裕貴の声が辺りに^{こだま}に響く。そして、辺りを静寂が包んだ。風も止んだ、鈴虫も黙り込んだ。世界を沈黙が支配した。

裕貴はびっしりと汗を掻きながら息を切らしている。永い沈黙が続いた。

蛍瑠の表情が歪んだ。とても悲しげで寂しげな表情だ。

—どうしても…なの。

「絶対に…厭だよ。まだ生きていたいんだ」

—そう…。

蛍瑠は残念そうに視線を下に遣った。

—竹村君は解ってない。

「何の事か知らないけど解りたくなんかないよ」

—可哀想に。

「何を云ってるんだ？」

—本当に解ってない。

蛍瑠が裕貴の両肩を掴む。

「やめろ！僕はあの世へなんか行きたくない！」

身を仰け反らせる裕貴に蛍瑠が顔を近付ける。

「やめてくれ、蛍瑠！」

耳元に彼女の唇が近付く。そして、小さく囁く。

—もう帰りなさい。迷子さん。

「え？」

―まだ解らないの？

「君は…本当に何を云ってるんだ？」

―矢っ張り…。

彼女は裕貴の目を確りと見据えた。

―じゃあ、教えてあげる。竹村君、貴方は迷子…。

―死者なのよ。

「馬鹿はよしてくれよ、そんな訳ないじゃないか！」

―自分が死んだ事が分からない事もよくあるのよ。それは竹村君も云っていた事でしょ？

「ふざけないでくれ！僕はこの通りはつきりと…」

裕貴は首を激しく横に振りながら云った。しかし途中まで云いかけた所で裕貴の言葉が詰まった。

あの時の映像が脳内で再生されたのだ。

激しく降りつける雨。

命令を聞かないハンドル。

一瞬辺りを青く照らす稲光。

宙に舞う躰。

目の前に迫るガードレール。

「あ…」

裕貴の顔がみるみる青褪めてゆく。

―少しは解ってくれた？

指先の感覚が僅かに薄れている。

「まさか、僕が…。そんな…」

―心当たり。あるでしょ？

「違う！僕は何ともない！」

裕貴は狂ったように声を荒げる。

「厭だ：厭だッ！」

裕貴はその場に蹲り、地面を掻き^{うずくま}つた。

―怖がらないで、道標はあるよ。貴方はもう迷わないわ。

「厭だあ！」

裕貴は顔を上げ、涙を流しながら声の限り^ほ叫えた。

―竹村君…。

「僕は、独りで逝くのかい」

―……。

「うわああああああ！」

裕貴は慟哭とも呼べる叫びを上げた。

「蛭瑠、ほたるう！厭だ、助けてくれ！」

彼女は裕貴を見下ろしたまま何も答えない。

「お願いだ、僕はあの世になんか逝きたくない、僕は死んじやないんだよ！」

―それは出来ない。貴方は逝かなければならない。

―貴方はもうこの世の者ではないのよ。

蛭瑠は彼を冷たく見据える。

―帰りなさい…。

「厭だああああ！」

裕貴は軀をのけ反らせ醜い咆哮を上げた。

「蛭瑠う！ そんなの寂しいよ、怖いよ、悲しいよ…」

裕貴は頭を掻き^{うずくま}ながら子供が駄々を捏ねるようにその場に座り込んだ。

「怖いよ、独りは怖いよ。君なら独りの怖さは解ってくれるだろう
蛭瑠！ 一緒に来てくれ！ お願いだ…」

―それは出来ない。

「何でだよ、寂しいじゃないか。一緒に来てくれよお！」
悪霊。

もう裕貴は悪霊だ。

―厭よ。

短く、そして明瞭^{はっき}と蛍瑠は云い放った。そう答えると悪霊は地面に転げ回り再び醜い叫びを上げた。

慟哭。

裕貴の叫びは獣のそれそのものだ。一頻^{ひとしき}り叫ぶと裕貴はひくひくと鳴咽を漏らしながらその場に蹲^{うずくま}った。

「厭だ、独りは厭だ…怖いよ。」

蛍瑠は屈み込み裕貴の頬に手を遣る。そして、優しい声で裕貴を諭した。

―大丈夫。独りじゃないよ。竹村君は独りじゃないから。

そう云って蛍瑠は、ぼんやりと光を放つ川面へと視線を送った。

―あの灯籠と同じだけ帰る人がいるのよ。貴方は独りぼっちにはならないわ。

「ああ…」

人の形をした頼りない程に朧げな光が無数に川面を漂っている。あれが帰^{かえ}ってゆく人々なのだろうか。

―ね。独りじゃないよね。

蛍瑠は聖母のような笑みを見せた。

―あの人に書いて行きなさい。きっと寂しくないから。

蛍瑠の肩越しの川岸には優しい表情をした老女が立っていた。ぼうと仄かな光を放っているような老女は裕貴に向かって柔らかに微笑む。

―もう大丈夫よね？迷っちゃ駄目だよ。

裕貴の視線は川岸の老女に釘付けになった。老女の表情は慈しみに満ちている。そしてその老女は優しく手を差し伸べた。

―さようなら。

蛍瑠は涙が伝う裕貴の頬から手を離れた。

「おばあちゃん…」

六

夏も終わり、季節は秋の兆しを見せている。

あれ程に五月蠅く鳴いていた蟬も愈々声を潜めるようになっていた。

屋根のない駅のホームには太陽の暖かい光が夏の名残のように燦々（さんさん）と照りつけていた。秋の空はうんざりするほど青く透き通っている。

特急列車がごとく音を立て、小さな駅を無視して走り去る。ベンチに腰掛けていた望月蛍瑠の黒い髪が通過する電車が孕^{はら}んできた風にふわりと揺れる。

― 本当に久しぶりね、亜希子も元気そうで何よりよ。最後に会ったのはいつだったの？

「大学卒業して以来じゃない、ほんとアンタどうしてたのよ全く。」隣に座っている亜希子は快活に答える。その傍らには困ったような顔をしながらもじもじしている加奈がちょこんと座っている。

― 加奈ちゃんは相変わらずいつも困った顔をしてるのね。

そう云いながら蛍瑠は加奈の顔を覗き込んだ。子供のように躰の小さな彼女はいつも判で押したように困った顔をしている。

― うふふ。

彼女たちと蛍瑠が再会したのは偶々（たまたま）だった。

蛍瑠が独り電車を待っていると亜希子がそれを見つけて、あ。蛍瑠！ と、張りのある大きな声を上げながら狭いホームを走って来たのだった。

― あなた達、相変わらず仲良しなのね。羨ましいわ。

「まあね、加奈とは小学校からの腐れ縁ってやつだからね。今でもこうやってよく買い物なんかも行くもんね」

亜希子が加奈の顔を覗き込むと加奈は眉間に皺をよせていた。相変わらずの困った顔だ。

「ほら、アンタも何か云いなさいよ」

亜希子有加奈の肩を敲くと、小さな躰がぐいと揺れる。

「…う、うん」

「ああもう、本当に喋らない子ね」

―そう云う亜希子は本当によく喋る子ね。

「よく云われる、ほんとに口から生まれてきたのかもね。あはは」

亜希子の気持良い程元氣な笑い声が静かなホームに響いた。

「蛍瑠って竹村君と仲良かったよね」

―うん、私にとって唯一の男の子の友達…だった。

「蛍瑠も彼の事。知ってるんだね」

こくりと頷くと蛍瑠はそのまま俯いた。先程までとは一転して辺りの雰囲気は重くなった。

遠くの方で生き残った蟬が弱々しく鳴いている。

「私も聞いた話なんだけど…交通事故だっけ。バイクで」

亜希子の発する一言一言に反応するように蛍瑠の肩は小刻みにふるふると震えていた。

「亡くなっちゃったんだよね…」

―うん…。

蛍瑠は膝の上で拳をぎゅうと握りしめている。

「亜希子…」

傍らにいた加奈が不意に亜希子の名前を呼んだ。しかし亜希子はそれを気にする事無く蛍瑠に質す。

「好きだったの？」

―ちよつと…ね。

地平の果てから電車の警笛が聞こえた。

「あの…ねえ…亜希子？」

再び加奈が亜希子に何かを問いかけようとしていたがまたもそれ

を無視するように亜希子は蛍瑠と話を続けている。加奈が表情を曇らせ不満を露わにする。

「こ、こんな話してゴメンね！」

—いいのよ。

ゆつくりと蛍瑠は立ち上がり一歩、二歩と前に進んだ。そして眩しそうに空を見上げる。

—竹村君…。

虚空に呟いた。

そして静かに瞳を閉じた。

「ゴメンね、もう会えない人の話なんかして。思い出させちゃったよね！」

—大丈夫よ。ちゃんとお別れは云ったから。

—先月、彼に会ったの。

「先月って何バカなこと云ってるのよ。竹村君はもっと前に亡くなってるじゃない」

亜希子が眉を顰め、怪訝な苦笑いを浮かべながら問いかける。

「ちよっと、亜希子？」

同じく困った顔の加奈も亜希子に声を掛ける。

—竹村君は迷子だったの。

電車の警笛が近付いてくる。

「蛍瑠、アンタ何ワケ解んない事言ってるの？」

蛍瑠が艶やかな髪を揺らして亜希子達の方を振り返る。

—でも、もう大丈夫なの。

「亜希子！」

加奈が仔犬のような声を上げた。亜希子はぽかんと口を開けたまま蛍瑠の方を見ている。

—竹村君はもう迷わないわ。

こうと重たい金属音を立てて再び特急列車が通過する。

「亜希子ったら！」

電車が孕んで来た風が駅構内で澱のように凝^{こじ}っていた空気を掻き回す。

そして蛍瑠はにこりと笑った。

「ねえ！」

亜希子の服の裾を加奈がまるで母親に甘える子供のようにぐいと引っ張っていた。

「うるさいわね、何なのよさつきから！」

電車が通過し、再び辺りには長閑^{のどか}な静けさが帰って来た。轟音を上げて目の前を鉄の塊が走り抜けた事などまるで嘘のように本当に静かになった。線路を伝って、すうと云う残響だけが特急電車の通った事実を物語っているようだ。

しどろもどろする加奈は何かを云おうとしている。

「あの、その…」

「何？ ほら、さっさと云いなさいよ。」

加奈が恐る恐る亜希子に問いかける。

「誰と喋ってるの？」

（了）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9062/>

迷子は月の下

2010年10月8日14時25分発行